

日本IT書紀

093 もはや戦後ではない

06 揺籃篇
卷之十三 乗炬

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第九十三

もはや戦後ではない

一

アメリカ合衆国で電子計算機が開発され、まずは軍用に、次いで民間に利用されるようになった一九五〇年代の前半、日本はとうとういかにも長閑な「戦後」の景色が広がっていた。舗装道路は都会のごく一部にしかなかったし、列車はもくもくと煙を吐いて走っていた。

赤木圭一郎、小林旭、宍戸錠などが常連で出演した一連のアクション映画は、突然のように西部劇まがいのシーンが挿入される独特の色合いをかもし出した。あるいはキャバレーのシーンや、アル・カポネ風の悪役や早撃ちのガンマンが登場した。

そういう中に颯爽と左ハンドルの輸入高級車（オープンカーだったりする）が現れ、のかたわらを馬に乗ったカウボーイ姿の主人公が疾駆する……というような映像を、観客は少しも不自然に感じなかった。つまるところ、戦後版の和洋折衷、正確にいえば和米折衷だった。

庶民の生活実感として「戦後復興の終わり」を告げたのは、発動機つき自転車とオート三輪の登場だった。これも和米折衷の一つの姿だったかもしれない。あるいは若者たちの反社会的エネルギーすらスポイルした戦後日本経済の成長力を示す証ともいえる。

現在は女性向けにデザインされたタウンバイクが販売されているが、一九五〇年代前後のそれは、大きくて頑丈な業務用自転車に五十ccのエンジンを取り付けた、まさに「発動機つき自転車」だった。

エンジンの音から「バタバタ」とも呼ばれた。それは本田宗一郎が旧陸軍の六号無線機の発電用エンジンを自転車に取り付けたものだった。初号機が発売されたのは一九四六年、それをもとに翌年、自社製エンジン「Honda」を取り付けたモデルが発売されている。

郵便配達員などが「バタバタ」に乗ってやってくるのを目の当たりにしたとき、人々は人力や牛・馬に頼らない動力源が自分たちの生活に入ってくる日を夢見ることができた。実際、それはコンバインやトラクター、田植え機などとして農村の機械化を実現した。

軽三輪トラックは、リヤカーに代わる運搬の利器として、たちまち「町のヘリコプター」の異名で町工場や商店、農村などに普及した。五七年十二月に大阪のダイハツ工業

(旧・大阪発動機製造)が発売した「ミゼット」が最初だった。ダイハツ系列のツバサ工業が開発した空冷二サイクル単気筒二百四十九ccエンジンを搭載し、十馬力で最大三百キロの荷物を運ぶことができた。

のちに数次のモデルチェンジを行い、アメリカやアジア諸国にも輸出され、累計六十万台が出荷されるベストセラーとなった。ただしアメリカでは公道を走ることはなかった。広大な工場の中を部品や資材を載せて走り回る搬送車として使われたのだった。

次いで五九年三月に愛知機械工業が「コニー」を発売したが、これは二千数百台を生産したにとどまった。同年五月に東洋工業(のちマツダ)が「K360」、十月に新三菱重工が「レオ」を発売した。

「K360」は丸ハンドル、二人乗りの密閉キャビンを採用し、工業デザイナー・小杉二郎による洒落たツートン・カラーのデザインが受けた。

「レオ」の名は手塚治虫の漫画『ジャングル大帝』の主人公に由来し、軽三輪としては最速の時速七十二キロを誇った。しかし庶民から見れば、どれでも「ミゼット」に見えた。

業務用のトラックにも三輪車が使われた。

第二次対戦前、東洋工業、ダイハツと並ぶ発動機メーカー

だった日本内燃機製造は、軍の需要がゼロになったのがダメージになった。そこに朝鮮戦争後の経済不況の影響による販売不振が加わって、一九五三年(昭和二十八)、東急グループに入っていた。

同じ年、旧連合国が設計・開発した車種のノックダウン生産——消耗品や装備などを除いて主要な部品を輸入して組み立てる——が認可されたのを受け、五七年に四輪のオタ自動車工業と合併し、五九年に「東急くろがね工業」と社名を変更した。

同社は五七年の十月、鋼製のフルキャビン、丸ハンドルで最大一・五トンの積載が可能なオート三輪「くろがねK S」を発売した。五九年に発売した後継モデル「K15」型は、千四百八十八ccのエンジンながら六十二馬力を発揮し、最大積載量二トンが可能だった。

こうして産業界の輸送に、従来の鉄道貨物一辺倒からトラックという選択肢が与えられた。

庶民の交通手段も多様化した。鉄道に加え、バスが全国の隅々をカバーするようになった。さらに都市部ではポネット型のバスとタクシーが普及した。

タクシーには日野自動車がいギリスからのノックダウン方式で生産した「ヒルマン・ミンクスD1X」、トヨタ自動車の「コロナ」が採用された。方向指示器はいまのよう

にランプでなく、車体の前方に付けた赤い矢印が出たり引っ込んだりした。

大都市で暮らす若者の間では、ガソリンエンジンの国産乗用車があこがれの的だった。五五年一月にトヨタ自動車がか千五百cc四気筒の高級車「トヨペット・クラウン」を、日産自動車がノックダウンで生産した「オースチンA50」を、東洋工業が二気筒三百六十五ccの「R360クーペ」を、五六年には富士重工業が「スバル360」をそれぞれ発売した。このうち「スバル360」が、モーターゼーションの大衆化に火をつけた。

二

一九五六年七月十七日、経済企画庁は『経済白書』日本経済の成長と近代化』で、

「もはや戦後ではない」
と高らかに宣言した。

原文は次のようだった。

貧乏な日本のこと故、世界の他の国々にくらべれば、消費や投資の潜在需要はまだ高いかもしれないが、戦後の一時期にくらべれば、その欲望の熾烈さは明らかに減少した。

もはや戦後ではない。

その言葉は同じ年の二月、雑誌「文芸春秋」に中野好夫が書いた論文のタイトルにほかならなかった。

中野は、

——終戦から十年が経ち、日本も国際社会に復帰したのだから、対ソ、対中など政治課題を個別に論じる時期がきている。

と論じたのだが、その真意はなかなか伝わらなかった。

この言葉とともに庶民が強く反発しつつ実感を持って口にしたのは、池田勇人が前年の国会答弁で発言した

「貧乏人は麦を食え」

だった。

正確にいうと池田は

「日本人は皆同じものを食べているが、所得の多いものは米、少ないものは麦本位としたい」

と答弁した。

彼は実情に正直であり過ぎた。

この時代の東京や大阪など大都市の街角には、軍隊帽をかぶり白衣をまとい、火傷のケロイドや義足・義肢をあらわにして物乞いをする傷痍軍人が数多くいた。戦災孤児は靴磨きや辻占売りをして糊口をしのいでいた。

宮城まり子が歌った「ガード下の靴みがき」はそうした世相を反映していたし、政府も現実とのギャップが大きいという認識はあった。

同日付で経済企画庁長官・高碓達之助は次のような談話を発表した。

戦後、日本経済はめざましい復興をとげた。この力強い発展は日本国民の前に一つの新しい課題を示している。どうすればこのすばらしい発展を持続し、まだこの経済繁栄の恩恵に浴していない国民の一部の人々にまで行き渡らせることができるかだ。

政府が「戦後」との決別を宣言したのには、一応の裏づけがあった。

五五年度の実質経済成長率は前年比九%増で、製造品出荷額は八兆六千九百十九億円に達し、国際収支を除けば国民一人当たりの実質所得や鉱工業生産などが太平洋戦争前水準を超えた。

前項のモーターゼーションを例にとれば、国内における自動車の生産台数は一九五三年までは年間一万台に達していなかった。五四年に初めて一万台を超え、五五年には二万台に倍増した。

小学校の社会科では「京浜工業地帯」「阪神工業地帯」が誇らしげに語られ、

「日本は石油や鉄などの資源を持っていませんが、加工技術は世界一です。外国から資源を輸入して優れた製品に加工して輸出する輸出立国なのです」

ということが、児童たちに教えられた。

石油化学の成果が庶民の生活に入り込み始めた。鉛筆のサックがビニールで作られ、定規などの文房具にプラスチックが使われた。一円硬貨が不足したとき、お釣の代わりに鉛筆のサックが使われたりした。

洋服が化学繊維で作られ、食器や玩具なども化学樹脂で成型された。たかが塩ビ管の輪に過ぎないフラフープの大流行は、まさに「戦後」との決別を意味していた。

加えてディーゼルエンジン用の軽油やガソリンの消費量が飛躍的に増大し、石油会社がおおいに潤った。ところが油田がない日本は、原油のすべてを海外から輸入するほかなかった。国策として中東に独自の油井を確保することと、大型タンカーの建造を求める声が産業界から強まっていく。

五七年の八月二十八日、東海村の原子炉が臨界点に到達した。これにより原子力の平和利用がスタートした。十月十四日には、ソ連が世界で初めて人工衛星「スプートニク1号」の打上げに成功した。それもまた、「戦後」に決別

を告げる出来事だった。

話が前後するが、一九五〇年以後の日本経済は、好況三年、不況一年のサイクルを繰り返した。五一年後半から五年にかけて朝鮮戦争特需に沸き、一年の低迷に耐えて五六年から「神武景気」が始まった。ピークは五七年六月で、三十一か月の拡張期のうち五八年に後退期に入った。

経済指標は前年度と比べプラスであっても、成長率が鈍化すると後退期が訪れる。時速百二十キロで飛ばしている列車が急に速度を八十キロに落とすと、列車は前に進んでいるが、乗客はつんのめる。ときに将棋倒しになる。このときの不況は鍋の底をさらっても何も残っていないというシヤレのような意味合いで「なべ底不況」と呼ばれる

「なべ底不況」は十二月続いた。三波春夫が月を見上げる手振りを添えて歌った「チャンチキおけさ」は不況の産物でもあった。次の好況は「岩戸景気」である。この好況はやや長く、拡張期は五九年から四十二年続き、ピークは六一年（昭和三十六）十二月だったとされている。その主役は石炭と鉄鋼、電機などだった。

なべ底不況から脱出したきっかけは、五八年十一月二十七日に行われた皇室会議の発表だった。

この日、皇室会議は「明仁皇太子の妃として正田美智子

を承認した」と発表した。皇室に初めて「庶民」出身の女性が嫁ぐことになった。

実際のきっかけが軽井沢でのテニスだったことが女性週刊誌やテレビで報道され、それまでの皇室のイメージを打ち破った。そもそも皇室が大衆の茶飲み話の対象になると自体、戦前には考えられないことだった。

「ミッチー・ブーム」が起き、「高原でテニス」が流行した。翌五九年になると、三月十九日に毎日新聞が清宮貴子内親王と島津久永氏との婚約をスクープした。皇室ブームはさらに増幅され、日本国中が祝賀ムードに沸いた。

皇太子の成婚パレードを見るためにテレビが爆発的に売れた。四月十日の成婚パレードは、全国一千五百万人がテレビを通じて見たとされている。そのテレビ電波に乗って、ペギー葉山が歌った「南国土佐をあとにして」、双子の姉妹ザ・ピーナッツの「可愛い花」、水原弘の「黒い花びら」、女性トリオのスリー・キャッツが歌った「黄色いサクランボ」がヒットした。

「黒い花びら」はNHK第一放送の深夜番組（当時、夜十時からの放送は立派な深夜番組だった）『夢であいましょう』（司会・中嶋弘子）の脚本を書いていた永六輔、ジョージ川口などと結成したジャズバンド「ビッグフォー」でピアノリストとして鳴らした中村八大のコンビで作られた。

水原弘のドスが聞いた声で大ヒットとなったこの歌は、第一回日本レコード大賞グランプリ受賞曲として歴史に名を残している。

同賞の創設者である永六輔によると、

「その年の十二月、仲間とワイワイ飲んでいたとき、ヒットしたレコードを表彰する賞を作ろう、という話になった。最初は冗談半分で、自分たちが作った歌がヒットしたお祝いのようなかたちだった」という。

永六輔と中村八大はその後も「六・八コンビ」を組み、六一年「上を向いて歩こう」（歌・坂本九、アメリカでは『SUKIYAKI』）、六三年「こんにちば赤ちゃん」（歌・梓みちよ）など、ヒット曲を次々に生み出した。消費を通じて社会・経済のあらゆる局面で大衆化が進んだ。テレビの普及が果たした役割は大きかった。

三

テレビの普及を象徴する歴史的建造物は、東京タワーであらう。

東京タワーが日本電波塔株式会社という民間企業によって建設され、現在も運営されていることは意外に知られて

いない。

建設したのは前田久吉である。

一八九三年（明治二十六年）四月大阪に生まれ、一九一四年（大正三）二十一歳のとき大阪の天下茶屋で親戚が営む新聞販売店を引き受けた。六年後に「南大阪新聞」を創刊し、夕刊専門紙の原型を作った。

三五年に経営が傾いた時事新報社の再建を引き受け、日中戦争のさなか四二年に大阪府下の群小五十紙を「大阪新聞」に統合、さらに産業紙を吸収合併して「産業経済新聞」を創刊した。のちの「産経新聞」である。

四五年八月の敗戦で公職から追放されたが五〇年に復帰し、「産業経済新聞」と「大阪新聞」の社長に返り咲いた。五三年の参院選挙で当選し最初は緑風会、のち自由民主党に属した。五七年から五八年にかけて、前田は絶頂期にあった。

東京タワーの建設を思い立った事情を、前田は『東京タワー物語』（一九五九年、河出書房）でこう語っている。

三十三年末から三十四年初めにかけて、東京地区には日本テレビ、NHKテレビ、ラジオ東京テレビの既設三局のほか、新しく富士テレビ、NHK教育テレビ、日本教育テレビの三局が開局することになり、合計六局の電波が出さ

れることになった。これまでの調子でいけば、六本のテレビ塔がせまい東京のどまん中に競い立つ計算となる。

貧乏国の日本としては、いかにもぜいたく過ぎるのではないか、というわけで郵政省をはじめ電波関係者のあいだでは、この事態を見越して昭和三十年ごろから「総合電波塔」という構想が真剣に検討されてきた。

前田は当時、関西テレビ放送、大阪放送の社長を兼ねていた。そのこともあって、東京―大阪の間を往復する生活だった。ある日、列車の窓から京都・東寺の塔を見た。見慣れた風景のはずだったが、彼は思わず「これだっ」とこぶしを握りしめた。

再び前田の回顧。

寛永十八年、徳川家光の再建にかかるものとは聞いていたが、三百余年の昔、すでに高さ五十七メートルという塔が日本人の手でできていた。昔であつてもこうである。まして科学技術が伸展した現代では、三百メートルの塔をたてるくらい、あえて至難な業ではあるまいと考えた。

ニッポン放送の技術部に同じことを考えていた男がいた。戦時中、海軍のシンガポール工廠に所属し、オランダ軍

から接収したスラバヤ工場の統括者であつて、帰国してリーダーの開発に没頭していた元逋信省技官・松尾三郎だった。このとき松尾はニッポン放送に移籍して、技術部次長の職にあつた。

彼は私案を企画書のかたちにまとめ、ニッポン放送社長であり富士テレビ（のちフジテレビ）専務の職にあつた鹿内信隆に提出した。

しかし鹿内は、

——現実的ではない。

として、書類を机の引き出しにしまつておいた。

ところが前田が「東京タワー構想」を東京都に提出した。そのことを知つて、大慌てで松尾が作成した企画書を東京都に持ち込んだ。

二つの案を受け取つた東京都は、いずれとも決めかねた。前田は現職の参院議員であり、新聞社と放送局の社長をいくつも兼ねている。政治的な支援は得やすいであろう。

一方の鹿内案（松尾案）も捨て難かつた。鹿内は四八年に日本経済連盟専務理事にあつて財界に顔が利いた。加えて社長を務めるニッポン放送、専務を兼ねる富士テレビはいずれも東京の放送局だった。

おまけに富士テレビの社長・水野成夫は財界の大物・洪澤敬三と深く結びついていた。結局、東京都は両者の案を

統合して、共同でテレビ塔を建設することに決定した。

四

一九五七年五月、「日本電波塔株式会社」が資本金五億円で設立され、ここに東京タワーの建設が始まった。発起人に名を連ねたのは、ニッポン放送会長・稲垣平太郎、産経新聞社長・前田久吉、旺文社社長・赤尾好夫、文化放送会長・洪澤敬三、東映社長・大川博、松竹社長・城戸四郎、東宝社長・小林富佐雄、大映社長・永田雅一、東急社長・五島昇、ニッポン放送社長・植村甲午郎、日本化薬社長・原安三郎、参院議員・安井謙など四十名だった。

東京タワーの建設が始まったのは、その年の六月である。設計は「塔博士」の異名を取った早稲田大学教授の内藤多仲、施工監理は日建設計工務、施工は竹中工務店、塔の加工は松尾橋梁と新三菱重工が担当した。百メートルを超える高層ビルが一本も建っていなかった当時、三百メートルを超える塔の建設は「技術の粋」そのものだった。

十二月十二日、地上四十メートルのアーチ型鉄骨が結合され、翌五八年十月、長二十五メートル、重量十三トンのスパーアンテナ、長八十メートル、重量八十トンの「スパーゲインアンテナ」が取り付けられ、ここに地

上高三百三十三メートル、赤と白に彩色された東洋一の電波塔が完成した。

——名前は「東京タワー」。

と発表したのは徳川夢声である。

十二月二十三日のオープニング式典には、高松宮、三笠宮、ときの内閣総理大臣・岸信介などが参列し、国電「浜松町」駅から増上寺を経てタワーに続く約一・五キロの道は人の波に埋め尽くされた。地上百メートルの展望台は、当時、国内で最も高い展望台だった。

大ヒットにはならなかったが、人気にあやかかって「テレビ塔音頭」（朝丘雪路）、「たそがれのテレビ塔」（フランク永井）、「東京三百三十三メートル」（ミラクルボイス）、「東京タワー」（美空ひばり）といったレコードが発売されている。

ともあれ東京タワーは浅草、上野と並んで、地方から東京にやってきた人々や修学旅行の団体が必ず訪れる観光のメッカとなった。オープン初年度の来塔者総数は五百十三万人となり、単一の観光施設として集客数で新記録を達成している。

このとき、前田久吉はさらに壮大な計画を持っていた。東京タワーの中に「東洋一」の電子計算機センターを作る

うとしたのである。

北川宗助も似たような構想を持っていた。北川は、提携していた日立製作所に、東京・大手町に大規模な電子計算機センターを作ることを提案していた。

「近い将来、顧客企業と通信回線で結んで、一大ネットワークを構築する」

アメリカ軍立川基地情報処理部隊の特別顧問としてアメリカを視察したとき、空軍基地で目撃したトランシーバーを使った物資管理システムのことを北川は考えていた。しかし、日立製作所は「通信回線とコンピュータを結ぶ」という発想が理解できなかった。このために北川の大手町電算センター構想は夢物語に終わった。

もう一人、松尾三郎は東京タワーの建設が始まったとき日本電波塔に籍を移していて、内藤多仲による構造解析の作業を通じて電子計算機に興味を持っていた。彼は戦前・戦中にレーダーの開発に従事した経験から、無線とコンピュータの融合を考えていた。

「東京タワーの電波受信機能を使えば、全国のどこからでも電算処理を受託できるではないか」というのだ。

この三人は出身母体と立場の違いから、電子計算機センター構想については最後まですれ違いのままだった。三人

が腹藏なく話し合っていたら、日本のコンピュータリゼーションは少し違っていたかもしれない。

前田は日本電気、日立製作所、富士通信機製造など国産電算機メーカーに話を持ちかけたが、電子計算機が高価すぎたこと、放送局や新聞社などから十分な仕事が発注される見込みが立たなかった。ためにその計画は棚上げにせざるを得なかった。

しかし「東洋一」への思いは強く、一九六六年、東京タワーの四階に電算センターを開設した。NEAC2200、FACOM230、TOSBAC3400などを設置するとともに、同年十二月、資本金一億円で「日本EDP株式会社」を設立した。のち、ソフトウェア産業振興協会の設立母体となった「四社会」の一社である。

補注

赤木圭一郎 あかぎ・けいいちろう／1939～1961。本名は「赤塚親弘」(あかつか・ちかひろ)といった。東京・麻布に生まれたが第二次大戦の空襲激化で疎開した神奈川県葉山で少年期を過ごした。五八年成城学園大学に入学し、同年八月日活の第四期ニューフェースとして「明日を賭ける男」で映画デビューした。

翌年一月に封切られた『嵐を呼ぶ友情』までは本名で通していたが、同年三月の『群衆の中の太陽』で「赤木圭一郎」の芸名が付いた。六一年二月、撮影所内で試乗していたゴーカーが鉄製の扉に激突し頭蓋内出血で死去した。「トニー」の愛称で多くの女性ファンを魅了した。

小林 旭 こばやし・あきら／1938～一九五四年、日活第三期日活ニューフェースに合格し、五六年公開の映画『飢える魂』でデビューした。石原裕次郎と並んで日活を代表する男性スターとなり、美空ひばりと事実婚の関係にあった(一九六四年離別)。

穴戸 錠 ししど・じょう／1933～2020。一九五四年、日活第一期ニューフェースとして入社し、日活アクションもので悪役をこなすハードボイルド系のスターだった。「渡り鳥」シリーズ、「探偵事務所23」シリーズなどのほか、テレビのドラマやバラエティ番組でも活躍した。「エースのジョー」が愛称だった。

本田宗一郎 ほんだ・そういちろう／1906～1991。本田技研工業創業者。静岡県磐田郡光明村に生まれ、高等小学校を出て東京・本郷の自動車修理工場で働いた。一九二八年浜松市にの

れん分けて「アート商会浜松市店」を開き、三七年「東海精機重工業」の社長となった。同時に浜松高等工業学校機械科の聴講生となつて機械工学を学んだ。四五年一月十三日に発生した三河地震(マグニチュード6.8、死者二千三百六人、行方不明千二百六十六人)で会社の建物が倒壊したのを機に会社の株を豊田自動織機に売って「人間休業」に入った。終戦直後、苦勞して買い出しをしていた妻の自転車の「エンジンをつけたら買い出しが楽になる」と思いつき、自動二輪車を思いついたという。

発動機付き自転車とオート三輪 敗戦国である日本とドイツには四輪車の開発・生産ばかりでなく、キャタピラ付重機械、排気量五〇〇以上のエンジンなどの生産も禁止された。このために郵便配達や警官の巡邏用に自転車の発動機を付けたり、物資輸送用に小型三輪トラックが作られた。ドイツの航空機メーカーであるメッサーシュミット社も一九四五年以後は小型三輪を製造している。発動機付き自転車が「原動機付き自転車」と言い換えられたのは運転免許証の対象となつたときから。

大阪発動機製造 のち「ダイハツ」と改称した。第二次大戦中は上陸用舟艇を製造していた。戦時中、「ダイハツ」といえば上陸用舟艇を指した。こうした発動機や内燃機の軍需産業のうち、東洋工業ものに自動車メーカーに転身している。

小杉二郎 こすぎ・じろう／1915～1981。東京に生まれ一九三八年東京美術大学(のち東京芸術大学)を出た。四四年商工省工芸指導所に勤めたが敗戦でフリーの工業デザイナーとなった。最初は自転車のデザインなどを行い、四八年から東洋工業のオート三輪のデザインを引き受けた。なかでも「R360」に採用したツートンカラーのデザインが工業デザイナーという新しい分

野を開いたとされる。

手塚治虫 てづか・おさむ／1928～1989。本名は「手塚治」。大阪府豊中町(のち豊中市)に生まれ府立北野中学(現・府立北野高校)在学中に大阪大空襲を体験した。医師を志すかたわら漫画家を志望し、四六年に処女作『マアチャンの日記帳』でデビューした。五一年大阪府立大学医学部専門 部(旧制)を卒業し、五三年東京・南長崎(のち椎名町)の民営アパート「トキワ荘」に移って独自の漫画世界を生み出した。六一年、奈良県立医科大学で医学博士の学位を取得し念願を果たした。七五年第四回日本漫画協会特別優秀賞、七九年巖谷小波文芸賞。

代表作は『新宝島』『鉄腕アトム』『ジャングル大帝』『リボンの騎士』『0マン』『マグマ大使』『どろろ』『ブラックジャック』『火の鳥』『アドルフに告ぐ』『ワンダースリー』『三つ目が通る』『ブツダ』など多数。日本のウォルト・ディズニーと呼ばれ、本家本元のアメリカのコミックやアニメーションに大きな影響を与えた。ペンネームの「治虫」は昆虫が好きだったことによる。初期はひらがなで「てづかおさむし」と名乗っていた。

ジャングル大帝 一九五〇年十一月号から五四年四月号まで「漫画少年」に連載された。ライオンの王「パンジャ」の子である「レオ」が醜い殺し合うジャングルの動物たちを率いて平和な王国を築いていくというストーリー。「鉄腕アトム」と並ぶ手塚治虫の代表作で、「火の鳥」と同様、繰り返し書き直された。デイスニー映画『ライオンキング』は「ジャングル大帝」の盗作と騒がれた。**経済白書** 一九四九年から毎年発行され、二〇〇一年以後は「年次経済財政報告」(通称「経済財政白書」)となっている。

中野好夫 なかの・よしお／1903～1985。愛媛県に生ま

れ二六年東京帝国大学を出て千葉県成田の中学校で英語の教師となった。三五年東大助教、四八年教授、五三年退官し雑誌「平和」編集長として原水爆禁止、反安保、沖縄返還、反核運動などに取り組んだ。

高崎達之助 たかさき・たつのすけ／1885～1964。大阪に生まれ一九〇六年水産講習所を出てメキシコに渡りメキシコ水産会社で缶詰工場の建設を指導した。アメリカ合衆国に滞在したとき、のちに大統領となるハーバート・フーパーと親交を結んだ。四一年鮎川義介に請われて満州重工業副総裁のち総裁となり、四五年八月ソ連の対日宣戦布告、関東軍崩壊にあつて日本人会会長として在満州日本人の安全確保に尽力した。終戦後満州にとどまり現地の復興に努め、五二年電源開発初代総裁として佐久間ダムの建設を推進した。五四年第一次鳩山一郎内閣で経済審議庁長官、五五年衆議院議員となり第三次鳩山内閣で経済企画庁長官。五五年のバンドン会議でエジプトのナセル、中華人民共和国の周恩来などと親交を深めた。日中関係の改善に尽力し、周恩来から最も信頼を寄せられていたという。

スプートニク1号 Sputnik-1ソ連科学アカデミーが開発し、五七年十月四日、シベリアのチュラタム射場(のちバイコヌール宇宙基地)から打ち上げられ地球周回軌道に乗った。直径五十八センチ、重さ八十三・六キロで四本のアンテナで電離層の観測、地上局との交信を実験した。このあとソ連は犬を乗せたスプートニク2号の打ち上げにも成功し、有人宇宙船の開発に踏み出した。**ペギー葉山** 1933～2017。本名は「森シゲ子」(旧姓は「小鷹狩」といった)。

ザ・ピーナッツ 伊藤エミ(沢田日出子)／1941～2012)、

伊藤ユミ (伊藤月子 / 1941 ~ 2016) の女性デュオ

水原 弘 みずはら・ひろし / 1935 ~ 1978。本名は「高橋正弘」といった。

スリー・キャッツ 一九五九年八月結成の女性トリオ。初期のメンバーは小沢桂子、梅田和代、上原由里江だった。

中嶋弘子 なかじま・ひろこ / 1926 ~ 2021。本業はファッション・デザインだった。

坂本 九 さかもと・きゅう / 1941 ~ 1985。本名は「大島九」(おおしま・ひさし) といった。日本航空123便御巢鷹山事故で死去した。

梓みちよ あずさ・みちよ / 1943 ~ 2020。本名は「林美千代」(はやし・みちよ) といった。

東寺 正式名称は「弥勒八幡山普賢総持院秘密伝法金光明四天王教王護国寺」で真言宗東寺派大本山。平安遷都(七九四)の二年後、桓武天皇が平安京鎮守のため朱雀大路の最南端羅城門の東西に建立した寺の一つで、西寺に対し東寺と呼ばれる。五重塔は天長三年(八二六)に着工し五十一年の年月をかけて完成した。その後、落雷や戦火などで四回焼失し、現在の塔は正保元年(一六四四)徳川三代将軍家光が建立した。高五十七メートルは木造寺院建造物として最も高い。

鹿内信隆 しかない・のぶたか / 1911 ~ 1990。北海道に生まれ三六年早稲田大学を出て倉敷絹織(現クラレ)に入った。

三八年応召し四三年日本電子工業の設立に参画、四八年日経連専務理事兼事務局長、五四年ニッポン放送専務、五六年社長。五七年水野成夫とともに富士テレビを設立し専務、のち社長、六八年産経新聞社社長を経て七四年フジ・サンケイグループを結成した。

水野成夫 みずの・しげお / 1899 ~ 1972。静岡県に生まれ一九二四年東京帝国大学を出て日本共産党中央委員。二七年中国大陸に渡り武漢革命政府顧問、二八年帰国し逮捕され転向を表明した。四〇年日本再生製紙会社を設立、四五年国策パルプに吸収合併され同社常務。四九年副社長、五六年社長。洪澤敬三に請われて文化放送の再建に乗り出し、五七年富士テレビ社長を兼ね六〇年産経新聞社長に就任した。

内藤多仲 ないとう・たちゅう / 1886 ~ 1970。山梨県に生まれ一九一〇年東京帝国大学卒業と同時に研究生となり建造物の耐震構造を専門とした。一三年早稲田大学教授、二二年「架橋建築耐震構造論」で構造設計の手法を確立した。六二年文化功労者となった。

徳川夢声 とくがわ・むせい / 1894 ~ 1971。本名は福原駿雄。鳥根県に生まれ一九二一年一中(現在の都立日比谷高校)を出た。一高の受験に失敗し活動弁士となり、三三年古川緑波、大辻司郎らと劇団「笑いの王国」を結成、二五年に放送を開始した東京放送で朗読番組を持った。四三年放送の朗読「宮本武蔵」が人気となり、戦後は「話の泉」、テレビ番組「私だけが知っている」などで活躍するかたわら雑誌に随筆や対談ものを連載した。五四年菊池寛賞を受けた。

日本IT書紀 093 もはや戦後ではない

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。